

<研究ノート>「右翼政治家」中原謹司試論： 愛国勤労党から信州郷軍同志会へ

田上, 慎一 / TAGAMI, Shinichi

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

78

(開始ページ / Start Page)

26

(終了ページ / End Page)

55

(発行年 / Year)

2012-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012070>

〔研究ノート〕

「右翼政治家」 中原謹司試論

——愛国勤労党から信州郷軍同志会へ——

田 上 慎 一

はじめに

本稿は、満州事変勃発の中で「右翼」系政党・愛国勤労党（以下、愛勤党と略記する）南信支部から長野県会議員選挙に出馬、当選し、陸軍省の指導のもとで結成されたといわれる信州郷軍同志会（以下、郷軍同志会と略記する）を背景に国政へと進出した中原謹司の人物像を描出、検討し、彼の中央政界進出の過程を再検討するものである。そして、それによって一九三〇年代の政治状況の一面を描出しようとするものである。

従来、中原謹司については、彼の所属した愛勤党南信支部や郷軍同志会を検討するという研究視点から「ファシズム運動」の担い手としての評価が下されており、そうした

先行研究として佐々木敏二「一地方におけるファシズム運動―長野県下伊那の場合―」^②や須崎慎一『日本ファシズムとその時代』^③などが挙げられる。^④

佐々木氏は、左翼青年運動に対抗して結成された思想善導団体である下伊那郡国民精神作興会から猶興社、愛勤党南信支部、郷軍同志会へと至る過程を検討し、これを「右翼運動」が「ファシズム運動」へと変化したものと捉えて、その源流には団体結成を主導した森本州平や中原らの勤王思想が存在するという見方を提起した。つまり、勤王思想をもち、かつ帝国在郷軍人会（以下、在郷軍人会と略記する）の役員でもある彼らによって主導されたことから、陸軍との結びつきが生まれ、「ファシズム運動」へと変容したのだと結論づけたのである。

一方で須崎氏は、佐々木氏と同じくこれら諸団体は「右翼運動」が「ファシズム運動」に変容したものとという立場から、「中原謹司手帳」や「森本州平日記」といった新たな史料を用いて考察を行った。その結果、須崎氏は一連の過程を「地域右翼・ファシショ運動」と名付け、地域に根ざして「右翼・ファシショ化」を図ろうとした運動が、陸軍との結びつきの中で「軍ファシズム」へと変容していったとする自説を提起した。その中で付随的ではあるが、森本や中原ら運動の中心にいた人物が「ファシショ化」していく過程を描き出している。

このように、佐々木、須崎両氏の成果により愛勤党南信支部や郷軍同志会の概要は明らかになったものの、主に左翼青年運動への対抗という構図に重きを置いたことから、中原が職業政治家になる過程について言及は少なく、また中原の選挙母体としてこれらの団体を検討していない。これでは、当時「新人」候補にすぎなかった中原が、なぜ長野県政に大きな影響力を持った大物代議士である小川平吉を破って初当選を飾り、終戦まで議席を守ることができたのかという疑問に対して答えられないのではないか。そこで、本稿は佐々木、須崎両氏の研究成果に依拠しつつ、従来「右翼」系団体としての評価しか与えられてこなかった

愛勤党南信支部や郷軍同志会などの諸団体を中原の選挙母体と捉え、中原が中央政界における職業政治家へと歩んでいく過程を再検討したい。

検討にあたっては、「中原謹司文書」⁽⁵⁾、「市瀬繁文書」⁽⁶⁾、「小林八十吉文書」⁽⁷⁾、「信濃毎日新聞」⁽⁸⁾、「南信新聞」⁽⁹⁾、「信濃時事新聞」⁽¹⁰⁾を主に利用した。

一 二つの源流と政界進出

1、政治家としての源流

まず、中原の略歴について述べておきたい。

中原は一八八九年、長野県下伊那郡龍江村（現飯田市）の地方名望家中原治部右衛門の次男として生まれた。飯田中学校を卒業後、早稲田大学に入学して一九一二年に坪内逍遙の主宰する文芸協会演劇研究所に入所した。俳優を目指したが親の反対を受けて断念し、一九一三年に文科哲学科を修業して帰郷した。同年一年志願兵として歩兵第六〇連隊に入営、一九一五年に再訓練を受けて歩兵少尉（のち中尉）に任官した。この年、信濃時事新聞社に入社、一九二〇年に南信電気株式会社支配人、一九二八年には信濃時事新聞社主筆となった。この間、地域青年の思想善導を目指した下伊那郡国民精神作興会に参加し、その後、

一九二九年猶興社という国家主義団体を結成した。これを核として一九三一年に国家主義政党政愛勤党南信支部を結成して支部長に就任、同年一〇月に実施された長野県会議員選挙において初当選を果たした。翌年第一八回衆議院議員選挙にも出馬したが、得票数最下位で落選した。一九三二年、郷軍同志会の結成に関わり、その理論的指導者となった。この郷軍同志会は、一九三三年、桐生悠々が「関東防空大演習を嗤ふ」を発表したことを契機に信濃毎日新聞不買運動を展開し、桐生を退社に追い込むなど、自由主義的・反軍的存在への排撃を行ったことで知られている。一九三六年、第一九回衆議院議員選挙に郷軍同志会から出馬して初当選を飾り、以後三期代議士を務めた。一九四〇年、大政翼賛会が発足すると総務局国民協力会議部副部長などを歴任した。敗戦後、一九四五年に衆議院議員を辞し、翌年公職追放を受けた。そして、一九五一年に六三歳で死去した。

一九一五年四月、陸軍将校任官のため再訓練を受けていた中原は日記に「自分の能力の継ぐ限り何れの方面へも活動して豊富な生活を送るのが自分の望みだと記した上で、「自分は学問、政事、経済、労働、何事にも興味と熱心とを以て活動する」と記した。当時二五歳の青年中原があら

ゆる分野に興味と熱意を示していたことを感じさせるが、これら分野のうち生涯を通じ、特に関わったのは「政事」であった。

中原が政治活動を開始したのは、一九一五年三月の第一二回衆議院議員選挙においてであった。中原は下伊那地域を基盤として出馬した樋口秀雄の選挙運動に深く関わり、樋口の選挙参謀として政治活動を開始したのだった。三月七日、前日に樋口の立候補を知った中原は、樋口の依頼で下伊那理想選挙団同盟会を説得するために出掛けた。この選挙に際して、立憲同志会を中心とする上下伊那地方の非政友会グループは、立憲政友会の公認候補伊藤大八に對抗すべく、統一候補の擁立を目指したが、様々な名前が挙がったため銚衡が難航していた。結局、立憲同志会の公認候補は樋口に決定したが、同地方において有力な支持母体となるべき下伊那理想選挙団同盟会や、上伊那青年同志会は伊原五郎兵衛を推しており、非政友会グループの足並みの乱れは明らかであった。こうした状況の中で行われた中原の下伊那理想選挙団同盟会訪問は、伊原擁立の断念を求めためであった。しかし、同盟会は中原の求めを拒絶した。これを受けて中原は樋口に大隈伯後援会からの立候補を勧めた。大隈伯後援会は早稲田大学出身の校友有志に

よって結成された非政友系の政治団体であり、この選挙に際しては「遊説隊」を全国に派遣するなどいわゆる「大隈ブーム」の中核を担う団体であった。¹⁹⁾ 中原は非政友会グループから樋口への統一的な支持が得られない現状を踏まえ、選挙母体として大隈伯後援会の組織化に努めたが、これは大隈伯後援会下伊那支部の発足という形で結実した。²¹⁾ これにより樋口は「大隈ブーム」の波に乗る形で勢いを強め、長野県郡部選挙区定数九に対して得票数第三位で初当選を果たした（以下、総選挙における得票数は後掲表参照）。この一連の中原の行動に見られるように、彼は政治活動に對して極めて現実主義的な人物であった。この現実主義的な一面は、のちに中原自身が職業政治家へと転身していく過程で「右翼」活動家という二つ目の顔を持たせることになる。

さて、その後、中原は、同年七月に南信地方における立憲同志会系新聞・信濃時事新聞社の編集部に入社し、ジャーナリストとして下伊那地域の言論界に影響を与えた。²²⁾ これは中原自身の政治的影響力を高めることにつながった。一九一七年、中原は下伊那憲政俱樂部（以下、憲政派と略記する）の発足に伴って宣言・決議文を起草したが、この頃には既に憲政派のホープとしての地位を確立しつつあつ

たと考えられる。当時、中央において再び高まりを見せた普通選挙運動は、普選即時断行を主張する地域の青年団の動きを活発化させたが、彼らは樋口に支持を集中させた。²³⁾ 青年団の樋口支持は同時に彼の選挙参謀である中原の影響を力拡大にもつながり、一九一九年に中原は南信電気株式会社²⁴⁾の支配人に招聘された。このように大隈伯後援会の支持調達を政治活動の起点とした中原は、普通選挙運動の高まりという追い風の中で、樋口と共に地域における社会的地位を向上させることとなつていったのだつた。

さて、樋口派の影響力を拡大させた普通選挙運動の高まりは、関係団体を簇生させた。例えば、一九二二年九月、羽生三七らよつて結成された自由青年連盟（一九二三年一月、自由青年連盟の英訳 Liberal Young League の頭文字をとつた「LYL」という名の組織に改組）はその一つであり、この団体は社会主義的指向性の強い団体であつた。²⁵⁾ 普選即時断行を掲げる樋口は当然こうした団体からも強い支持を受けており、自由青年連盟もまたその一つとなつていた。しかし、一九二四年三月にいわゆる「LYL事件」が起これると、治安警察法違反で自由青年連盟や下伊那青年会（以下、郡青と略記する）の幹部が一齐に検挙されたため、それまで青年団を主な支持基盤にして政治的影響力

を保持していた樋口派の状況が一変した。具体的にはまず第一に、地方名望家層がこの事件を契機に態度を硬化させた。「LYL事件」で検挙の対象となった自由青年連盟には地方名望家層の子弟たちも関与していた。⁽²⁷⁾この事態に地方名望家層は強い衝撃を覚えた。この衝撃の背景には、その四カ月前（一九三二年二月）に起こった虎ノ門事件があった。虎ノ門事件を起こした難波大助は、衆議院議員難波作之進の四男であり、地域を善導すべき地方名望家の子弟が自ら社会主義運動に関わり、国体を破壊しようとしたのである。下伊那の地方名望家層はこの難波と自由青年連盟に関わった自身の子弟たちを重ね合わせ、「第二の虎ノ門事件」を引き起こしかねない危険が身近に存在していたことになきな衝撃を覚えたのであった。この衝撃は同時に自由青年連盟をはじめとする青年団の支持を受けて政治的影響力を保持していた樋口への不信につながっていった。例えば、下伊那地域で有数の地方名望家森本州平は日記に次のように記している。

郡内青年間に非国民的物質的傾向⁽²⁸⁾に漫⁽²⁹⁾し之を煽動するものは樋口秀雄にして之が傀儡⁽³⁰⁾ライたるものは信濃時事新聞なり、有識者は大に之を憂ふれとも政党の桎梏にからめられて如何ともする能はず、彼樋口が教育に

理解を有すると云ひて危劇なる思想を誘導するは憎みても余りありと云ふべし⁽³¹⁾

こうした地方名望家層の樋口への不信は、一方で憲政派に押され気味であった下伊那政友倶楽部（以下、政友派と略記する）を攻勢に転じさせた。政友派はこの「LYL事件」を勢力挽回の好機と捉えてこの事件の逆宣伝を行ったのだ⁽³²⁾。この逆宣伝により樋口ら憲政派は動揺することになった。

また第二に、樋口への不信を表明する勢力は地方名望家層のみに留まらなかった。樋口を強く支持してきた青年団からも樋口への不信を明らかにするものが出てきた。彼らは樋口ら憲政派が青年や労働者の運動を自党の勢力拡大に利用しようとしたとして反発し、樋口ら憲政派と距離をおいた⁽³³⁾。これにより樋口は政治生命の上で最大の危機を迎えることになった。こうしたなかで行われたのが同年五月に実施された第一五回衆議院議員選挙である。この選挙戦において、樋口の支持母体のうち天童労働団と郡青が選挙戦を傍観する態度を明らかにした上に、前述の事情から地方名望家層が樋口を忌避して厳しい選挙戦となった。これらに加えて、政友派が県会議長を務めた重鎮の平野桑四郎を候補者として擁立したことから形勢は更に悪化した。ただ、

幸いに郡青は「LYL事件」によって既に分裂状態に陥っていた。これに加え、個々の青年団の中には引き続き樋口を支持する団体もあり、彼らを基盤として政友派の取り込みを図りながら樋口は選挙戦を進めることができた⁽³⁴⁾。この結果、樋口は得票数二〇数票差で平野に辛勝することができたのである。

しかし、この辛勝は樋口派に二つの課題を残した。それは、地方名望家層と青年団の支持回復である。では、この課題に樋口の参謀である中原はどのように取り組んだのだろうか。

2、「右翼」としての源流

一九二四年一〇月、「LYL事件」をきっかけとして森本州平を中心とした地方名望家層は、下伊那郡国民精神作興会（以下、作興会と略記する）を結成した。主唱者の森本は「右翼」的思想のもとにこの結成を唱えていた⁽³⁵⁾が、他の地方名望家たちは当時予審の様相が大々的に報じられていた「LYL事件」の衝撃から作興会の組織化に動いたのだ⁽³⁶⁾。当初は穏健な教化活動で青年の思想善導を図ろうとしていたが、早くも半年ほどで活動は行き詰まり、より強制力のある手段を採ろうとしていた。すなわち、一九二五年

一〇月に郡青によって軍事教育反対運動（青年訓練所設置に反対して起こった反対運動。以下、軍教反対運動と略記する）が開始されたことを受けて、郡青への補助金打ち切りを含めた方法を採り、新たに「善良青年」によって構成された連合青年会（以下、連青と略記する）の結成を企図するようになったのである⁽³⁷⁾。

この青年団に対する統制強化の動きの中で、中原は森本に対して「作興会の為に援助を約し」た⁽³⁸⁾のだ。中原は作興会発足時から理事として名を連ねていたが、彼が本格的に作興会との関わりを持ったのは軍教反対運動が起こってからである。では、なぜ中原は作興会との関わりを強めたのだろうか。その答えとしては、新たに設立されようとしている連青を介して、青年団に対する樋口派の影響力を残そうとしたことが考えられる。前述したように既に第一五回衆議院議員選挙において青年団からの統一的支持を失っていた樋口派は、再び青年団の支持回復を図る必要があった。その点において、新たに結成が企図されている連青は、それが実現すれば、再び青年団からの統一的支持回復を図る好機ともなり得るのであった。それに加えて、作興会は地方名望家層を横断的に包含しており、要するに、中原の同会参加は前述した樋口派の課題への対応であったと言

えよう。

一九二五年一二月、下伊那郡役所で軍教問題対談会が開催され、青年訓練所設置に反対する郡青代表と設置に賛成する在郷軍人会代表各一〇名が軍事教育の是非をめぐる対談した。中原は在郷軍人会代表の一人として論陣を張り、いわばこの対談会が「右翼」活動家としての中原のデビューの場となった。この対談会において社会主義思想のもとに軍事教育に反対する青年団代表の意見に対し、中原は次のように述べている。

資本主義文明と申すものは科学哲学の上に成立してゐる。唯物文明と科学哲学は進歩発達の哲学なるが故に、著⁽⁴⁷⁾しい発達をとりてゐる。即ち何が何でも旧套を侮辱して前へ前へと進むのが科学文明、資本文明の特質であります。ダーウキンが進化論を唱へ十年を経ずしてマルクスが唯物資本論を著したが、此の科学文明、科学哲学に基調を置いて居ります。「前へ」と云ふのが其モットーである。進化哲学なるが故に力の哲学であり、力を伸ばすのが科学文明であるから各国に資本主義がある以上、この世界から戦争と云ふものは免れない。少くとも資本主義精神が救はれない間は此の精神が何等か唯心的方面に変らないうちは、戦争は絶え

得ざるものと信じます。⁽⁴⁸⁾

この中原の発言に見られるように、彼は社会ダーウイン主義の認識のもと、「戦争は絶え得ざるもの」と考えていた。その上で「人はパンのみによつて生くるものではない。人は食ふと同時に理に動き、情に感じ、名誉権勢も欲するもの」⁽⁴⁹⁾であるとして、国家の名誉や権威を守るためには軍事力が必要であるとの認識を述べた。ただ一方で、この対談会の中で「日本が進んで他と戦争する必要はない」とか、「在郷軍人だからと云つて決して戦争は好きでない」と中原は繰り返し述べている。⁽⁵⁰⁾以上を踏まえると、中原は軍事力を国家の発展に伴う戦争における手段として不可欠なものと捉えていたと言えるだろう。この認識は彼の「右翼」活動家としての主張の根底となっていく。

さて、軍教反対運動は中原と政友派の森本州平を強く結びつける契機となった。中原は森本らと共に郡青の切り崩し工作を行い、それは一九二六年二月に上郷、上飯田、泰阜、竜丘の四カ村青年団による連青の結成として結実した。これにより下伊那地域における青年運動は左派を形成する郡青、右派を形成する連青、いずれにも参加しない中間派という三派鼎立状態が現出した。⁽⁵¹⁾

一九二八年一月に田中義一内閣は衆議院を解散し、いよ

いよ普通選挙が実施されることになった。この選挙では、それまでの小選挙区制が改められ、選挙区が複数の行政区に跨った中選挙区制となった。このために政民共に候補者銓衡が問題となり、政友派ではこれに起因して幹部間の対立が起こり、この結果分裂して新たに立憲政友革新会（以下、政友革新会と略記する）が誕生する事態となった。⁽⁴⁵⁾ また、鈴木喜三郎内務大臣による選挙干渉や政友派の買取工作に對して地域から反発が起こり、⁽⁴⁶⁾ 反政友派の樋口派にとつては追い風の選挙戦となった。開票の結果、樋口は定数四に對して得票数第一位で当選を果たし、前回の総選挙以降の樋口派の行動が間違いではなかったことが明らかになった。更に、総選挙直後にいわゆる「三・一五事件」が起こり、この結果左派系の郡青の主要幹部が全員検挙され、郡青は解体してしまつた。⁽⁴⁷⁾ これにより下伊那地域における青年団連合組織は連青だけとなり、樋口派がかつてのように青年層からの全面的支持を得られる環境が整つたのであつた。

しかし、同年九月に樋口は突如民政党を脱党し、新たに議會内小会派の憲政一新会⁽⁴⁸⁾を立ち上げた。これにより民政派は「樋口支持派と純民政派との両派に岐れ、將に分裂の危機に直面し」⁽⁴⁹⁾た。樋口は自らの手で安定した「地盤」を崩してしまつたのである。中原はこうした状況を受けて、新たに樋口の個人後援会発足に向けて動き出した。その結果として結成されたのが後に「猶興社」と名付けられる団体であつた。しかし、樋口が一九二九年六月に急逝したため、民政派内であつて「ホープ」としての地位を確立していた中原は、「樋口の後継者」を自負して、この新団体をもとに職業政治家を目指すこととなつたのである。

中原は森本を介して全日本興国同志会に参加し、⁽⁵⁰⁾ 一九二九年七月に同会が政党化方針を決定したことを受けて、同年一二月にその地域組織として猶興社準備会を結成した。全日本興国同志会は「右翼」系政治団体であり、これがのちに愛勤党へと発展することになる。猶興社は「⁽⁵¹⁾ 青年及壯年を糾合」⁽⁵²⁾することを目指しており、樋口の個人後援会としての性格を色濃く受け継いでいた。しかし、猶興社が主要構成員としていた青年層は無産政党に関心を高め、反既成政党的志向を強めつつあり、その中で猶興社は反既成政党・反無産政党を掲げざるを得なかつた。ただ、中原自身が強く既成政党に反感を持っていたわけではなかつた。⁽⁵³⁾

こうした猶興社の組織化を進める一方で、中原は民政派内において樋口の後継者としての立場を確立する争いを展開していた。そのライバルとなつたのが民政派幹事長の遠

山方景⁽⁵³⁾である。遠山はもともと飯田郵便局長であったが、樋口が自身の「懐刀」として登用し、一躍民政派の中心となった人物であった⁽⁵⁴⁾。この両者の対立は、一九三〇年の第一七回衆議院議員選挙における公認候補の銓衡を巡って頂点に達することになった⁽⁵⁵⁾。すなわち、中原と遠山は共に「樋口の後継者」を自負して民政派からの立候補を目指したのである。しかし、この立候補を巡る争いに際して、中原の最大の障壁となったのは彼の個人後援会として活動すべき猶興社準備会であった。一月一七日に中原は自身の立候補や選挙対策について猶興社準備会の幹部と打ち合わせた⁽⁵⁶⁾が、この会議において中原が「民政党」から、筆者註、以下同じ」立候補となりたる場合は立候補すると明言⁽⁵⁷⁾したのに対して、会議に同席していた吉野福一が「既成政党を是認し、之に走るならば政事の改造は最早望まれない。併し中原氏と手を切る様になるかも知れん⁽⁵⁸⁾」と言い、中原との認識の違いを明らかにした。吉野は猶興社準備会において青年層を取りまとめる中心人物であり、これを踏まえる⁽⁵⁹⁾と青年層は中原の既成政党からの立候補を一切認めない姿勢だったのである。こうした青年層の意向に加え、猶興社準備会のもう一人の中心人物である森本が選挙運動に同会が臨むことは時期尚早と考えていた⁽⁶⁰⁾こともあり、この会合

において「此際猶興社は如何なる事ありても政戦とは別に進む事⁽⁶¹⁾」と決定した。しかし、猶興社準備会が動かないことが鮮明になった後も中原は立候補に固執し続けていた。結局、森本が「予め猶興社は今回の選挙とは無関係とする、中原には友人として自重せられたしと忠告⁽⁶²⁾」して引導を渡し、中原はようやく立候補を断念したのである。この立候補を巡る青年層との認識の違いは、中原に既に民政派からの立候補が難しいことを改めて認識させることになった。

一九三〇年一二月、猶興社は発会式を行い、ここに青年層を主要構成員とした中原の個人後援会組織がようやく形成された。翌年四月一日に猶興社は政党化方針を決定し、同社は更に同月二九日には愛勤党下伊那支部の設立を決議した⁽⁶³⁾。この下伊那支部は八月に入り、愛勤党南信支部と改称したが、この動きから見ると当初から国政をねらったものであったことは明らかであろう。尚、四月に入ってから動きが速やかに行われた背景には、郡青委員長として青年団の左派、右派、中間派いずれからも支持を集めていた座光寺久男⁽⁶⁴⁾が愛勤党に加入したことが挙げられる。この座光寺の愛勤党参加により、広く青年層の愛勤党参加を生むことになった。この青年層の結集は中原にとっては思わぬ「副産物」を生むことになった。すなわち、中谷武世（愛

勤党書記長）が青年層の間で支持が集まっていないことを理由に、森本に対して事実上の「引退勧告」を出したのである。これによりそれまで中原と森本の「双頭体制」とも言えた猶興社は、中原の個人後援会として明確化した。こうした組織としての確立が図られつつあったことを受けて、中原は五月に民政党脱党の上で愛勤党に入党することを声明した。⁽⁶⁵⁾そして、七月に正式に愛勤党南信支部の支部長に就任し、いよいよ中原が政治の表舞台へと登場したのである。

3、県会選挙当選と総選挙敗北

このようにして愛勤党南信支部は発足することになったが、これは中原の県会議員選挙出馬に合わせたものであった。⁽⁶⁶⁾中原は自身の中央政界進出の前段として、民政派の切り崩しを狙ったのである。実は、下伊那郡は民政派の最大票田であったものの、有力な拠点であった飯田町（現飯田市）から県会議員を出したことがなかった。そのために「県会議員を出さなかつたのを遺憾とし今期は必ず一名を擁立すべしの与論」⁽⁶⁷⁾が高まっていた。中原は出身こそ龍江村ではあったが、飯田町に在住して脱党直前まで飯田町の民政派に大きな影響力を持っており、いわば中央政界進出に向

けての地盤固めとして民政派の切り崩しを図ることが重要だったのである。他方、民政派は中原の県会選挙への出馬に警戒感を持っており、脱党後の中原は民政派にとって当然脅威となっていたのである。

八月二七日、愛勤党南信支部の発会式が飯田劇場において行われたが、中原はここで正式に公認候補として擁立された。⁽⁶⁸⁾これを受けて、九月一七日に立候補届を提出して選挙に出馬したが、既に八月の時点から実質的な選挙戦が開始されていた。愛勤党南信支部は他の政党と同様に「猛烈な潜航運動を開始し何れも個人或は団体等に対し、擁立関係その他の理由をたよつて買収策を講じ」⁽⁶⁹⁾ていたという。また、県会選挙後には「口に選挙浄化を叫び乍ら阿南某方面及び某財閥より多大の資金を獲得し、攻撃する某既成政党の戦術と同じ様に相当バラまいた」⁽⁷⁰⁾と噂されており、真偽は定かではないが中原の選挙戦には相当の買収工作がなされていたと見られる。

こうした買収工作の一方で、愛勤党南信支部のもと、複数町村に設置した班組織が中原の選挙戦を支えていた。この班単位の活動には、中原が在郷軍人会の幹部であったことから、多数の在郷軍人を糾合する方針であった。⁽⁷¹⁾つまり、青年団と在郷軍人が中原の選挙運動の両輪となって活躍し

たのである。この在郷軍人の活用は中原の選挙戦においては大きな特徴であったが、他方、在郷軍人が指導員を務める青年訓練所の生徒を選挙運動に動員したことから、後述するように、思わぬ反発を生むことになった。

以上、選挙運動と選挙体制の両面から中原の選挙戦について明らかにしたが、こうした選挙戦を展開した中原は支持されたのであろうか。当初から愛勤党南信支部に対しては既成政党や無産政党が異端視していたが、中原が当選後に民政派に復党する可能性があったこと、更に前述した事情もあり飯田町の民政派から広く支持を受けていたと推察される。事実、九月一九日には飯田町の町内会が中原の全面的支持を打ち出しており、こうした動きは、民政派幹部の造反や政友革新会による中原への支持表明につながった。⁽⁷⁶⁾

こうした追い風の結果、中原は定数五に対して得票数第四位で当選を果たした。尚、この選挙戦には遠山方景も立候補していたが、遠山は次点で落選した。結局、樋口の後継者争いは中原に軍配が上がったのである。この結果に自信を持った中原は民政派からの復党要請を拒絶し、いよいよ中央政界に向けて動き出すのである。

一月二一日に南信支部大会を開催した中原らは、この場で県会議員選挙に際して中核を担った「班」を「支部」

に格上げすることを決定、宣告し、総選挙に向けて南信地域の選挙地盤強化を図った。⁽⁷⁹⁾更に翌年一月一日に、犬養毅内閣が衆議院を解散することを見越して、候補者擁立と選挙資金調達について協議を行った。⁽⁸⁰⁾恐らくこの場で中原の立候補が再確認されたと考えられる。

これ以後、中原は選挙準備を進めたが、ここで二つの誤算が生じた。第一の誤算は、中原が風邪をこじらせて急性肺炎に罹ったことであつた。⁽⁸¹⁾これにより中原の立候補を周囲に躊躇させたばかりでなく、中原自身が動けないことによつて彼を支援する動きを鈍らせることになった。また、これを利用して、他の政党が自党系の新聞を用いて「中原重患説」や「中原死亡説」を大々的に報じた。こうした手法は中原の選挙運動の大きな障壁となつたのである。第二の誤算は、総選挙の準備過程において大日本生産党が中原の立候補する長野県第三区（諏訪郡・上下伊那郡で構成。以下、長野三区と略記する）から候補者を擁立しようとしたことである。⁽⁸²⁾当時、愛勤党本部は、社会民衆党で右傾化を見せ始めていた赤松克麿らと連絡を取りながら日本国民社会党準備会を結成するという、いわば「右翼勢力の大合同」を図ろうとしていた。⁽⁸⁴⁾中原も日本国民社会党準備会から推薦を得ていたが、合同問題や統一候補の擁立に不満を

抱いた大日本生産党が独自候補の擁立に動いたのだった。しかし、実際には大日本生産党は候補者選出を行わず、愛勤党南信支部は二月一日の党員大会で正式に中原を候補者に決定した⁽⁸⁶⁾。

こうして中原はようやく立候補にたどり着いたが、この総選挙における運動は県会議員選挙時とは全く異なった形で進むことになった。すなわち、県会選挙時の支持者が中原を支援せず、愛勤党南信支部内の青年層が運動の主体となったのである。尚、県会選挙で中原を支援し、一貫して活動を共にしていた森本州平すらも支援の運動を行わなかった⁽⁸⁷⁾。こうした事態となった背景には、県会選挙時の選挙手法が大きな影響を与えていた。前述したように中原は県会選挙時に青年訓練所の指導員や生徒を用いて選挙運動を展開したが、これ⁽⁸⁸⁾に対して地方名望家層が大きな不信感を露わにしたのである。青年訓練所は町村から公費が充てられ、在郷軍人を指導員として運営されていたが、公費で運営される青年訓練所が一党に偏する選挙運動を展開したことが、原因であった。こうした不信感⁽⁸⁹⁾は中原の有力な支援者であった森本にも向けられたため、森本も中原を支援することはできなかった。また、何よりも県会選挙の当選後に民政派からの復党要請を拒絶したことも支持者離れに

拍車をかける結果となった。この総選挙には前年の県会選挙時に中原が破った遠山方景も出馬していたが、民政派は遠山支持の方針で一致した行動を採ったのである。

これらにより、中原は苦しい選挙戦を強いられ、選挙終盤には資金枯渇状態に陥り、森本に対して資金援助を求めたほどであった⁽⁹⁰⁾。ここからも中原がいかにこの選挙で支持者離れに悩まされていたかが窺える。結局、他の候補者が一万票以上の得票を得る中で、三二六票しか獲得できず、最下位で落選となったのである（中原の総選挙における得票数推移及び郡別の得票率については後掲図1・図2参照）。

この総選挙は当初の期待に反する結果となったが、一方で中原の中央政界進出には愛勤党南信支部とは別の組織、つまりより一層地域的支持をまとめる選挙母体が必要であることを認識させた。青年層だけの支持では中央政界進出には不十分であったため、在郷軍人というより広い選挙地盤に着目し、これを得ようとしたのである。こうして中原は在郷軍人の政治的組織化を目指すことになったのである。

二 信州郷軍同志会の結成と国政進出

1、信州郷軍同志会の結成

一九三二年五月二十九日、郷軍同志会準備委員会の第二回会合が開かれ、趣意書、規約、役員を決定してここに郷軍同志会が誕生することになった。⁽⁹¹⁾この郷軍同志会結成の起点は、一九三二年三月三十一日に開催された連隊区将校団演習会後の懇親会の席上、参謀本部支那班長根本博中佐が「郷軍蹶起」を呼びかけたこと⁽⁹²⁾にあった。この懇親会に出席していた在郷軍人会本部評議員宮澤修二（上高井郡連合分会長）⁽⁹³⁾は、この発言を受けて東京の在郷軍人会有志の意向を語り、「郷軍有志の実行団体」の必要を説いた。⁽⁹⁴⁾これ以後郷軍同志会の結成運動が展開されるのであるが、既に中原は自身の政界進出を目的として明倫会と関わりを持っており、これとは異なる方向から在郷軍人の政治的組織化に動き出していた。⁽⁹⁵⁾中原は郷軍同志会結成運動に合流し、その中で明倫会とのつながりを武器として理論的指導者となっていくのである。

では、そもそも在郷軍人らはなぜ郷軍同志会の結成へと動いたのであろうか。郷軍同志会の結成を担っていたのは前述のように在郷将校であった。彼らの多くは在郷軍人会

幹部であり、また地方名望家でもあった。しかし、彼らが率いる在郷軍人会は、政治的には必ずしも「一枚岩」になれなかった。在郷軍人会の大半を占めるのは下士官や兵であり、その多くが農民や労働者であった。彼らの多くは既成政党支持者であったが、昭和恐慌を経て「現状打破」を訴える農民団体や労働団体の構成員となり、無産政党を支持する者も出ていた。既に政友派・民政派の影響力は在郷軍人会内にも及んでおり、在郷将校たちも政民両派のいづれかに関わりを持っていた。⁽⁹⁷⁾こうした状況の中で、在郷軍人会内に政民いずれも支持しない「第三派」の勢力が出現したことは、在郷将校の政治的影響力拡大を促したのである。つまり、郷軍同志会にこの「第三派」勢力の中堅人物を取り込むことで、在郷軍人会内の在郷将校の政治的影響力の拡大をも図ることができたのである。

ただ、在郷将校たちは在郷軍人の政治的組織化を構想しつつも自らそれに動き出すことはできなかった。なぜならば、在郷軍人会規約には「本会は団体として政治に関与し、又本会会員は本会の名目を以て政治に関与することを不得」と定められており、陸軍省や連隊区司令部の反応を懸念したからである。そうした中で登場したのが前述した根本博と松本連隊区司令部の古思了中佐⁽⁹⁸⁾であった。古思は

在郷軍人を政治的に組織化するという「全日本郷軍同志会構想」を抱き、陸軍を政界から支援する組織の結成を企図していた。⑩彼らの積極的な発言は、在郷将校たちを大きく動かすことになった。すなわち、在郷将校たちは「陸軍公認」のもとで政治組織を結成できると考えたのであった。従来、古思や根本ら現役将校との関わりから郷軍同志会は「軍ファシズム」の一端と見なされてきたが、これが現役将校主導ではなく、在郷将校主導であったことは注目、留意されるべきである。

それに加えて、古思や根本は陸軍省の少数派であったことも強調しておきたい。事実、古思は麻布連隊区時代に「全日本郷軍同志会構想」の実現に向けて活動を行っていたために松本連隊区に左遷された経歴があり、古思や根本の発言は、在郷将校が考えたような「陸軍公認」とはほど遠かったのである。こうしたことは、郷軍同志会の発足直後に同会と松本連隊区司令部との関係悪化という形で明らかとなった。この問題の解決のために郷軍同志会の幹部たちは陸軍省徴募課や明倫会と交渉しなければならなかったのである。⑪その過程で明倫会とのつながりをもつ中原の人脈が大きな役割を担った。この交渉の結果は不明だが、一月に行われた発会式に林桂と池田純久が同席したことを踏ま

えると、陸軍省側の一定の理解は得られたと推察される。

しかし、これも「陸軍公認」を意味しなかった。なぜならば、その後も陸軍省や在郷軍人会本部は郷軍同志会のような在郷軍人による政治団体や在郷軍人であることを前面に出した政治活動に対して、否定的な見解を示し続けたからである。その代表的な見解が、一九三三年五月に陸軍省徴募課長松村正員が連隊区司令官会議で行った講演「進出中の新たな諸団体と在郷軍人会員」であった（尚、徴募課長は在郷軍人を監督する立場にある）。この中で松村は、在郷軍人会の名を「個人的事業に利用せんとし或は之を政治団体、思想団体等の勢力扶植に利用せんと企てつ、あるもの等」があり、更に「現況を愁ふる者若は此機に乗じて野望を果さんとする者等に依つて或は政治的に或は思想的に右翼的硬派の色彩を有する各種団体」が組織され、その中には在郷軍人会の有力者も含まれており、「焦慮」していると述べた。⑫その上で松村は次のように加えた。

此種団体「在郷軍人を糾合した政治団体」中には或は、本省「陸軍省」の了解ありと称し或いは、「在郷軍人会」本部の後援ありと吹聴するものがある様子であるが本省は勿論軍人会本部に於ては決して斯る団体に関係を有するものは一つも無いことを茲に明言する。「傍点ママ」。

「中略」抑も既成団体の罪悪を是正せんとするの意志を在郷軍人の一員として企藏する⁽¹⁴⁾ことは固より排撃すべきでなく寧ろ当然であろうけれども之が為在郷軍人の結束して政治的に進出することは吾人の最も執らざる所である⁽¹⁵⁾。

こうした発言は、陸軍省が郷軍同志会に否定的であったことを明らかに示している。もともと、在郷軍人会規約の政治不関与はあくまで在郷軍人会という組織に関する規定であり、個々の在郷軍人にどこまで適用できるか曖昧な部分も存在した⁽¹⁶⁾。そのため、現役将校の中にも池田や林らのように、少数派ではあるが、是々非々の立場で在郷軍人による政治団体に関わりを持つとするグループや、古思や根本らのように積極的に関わりを持つとするグループもいたのである。郷軍同志会側はこうした中で活動を展開することになった。その中で特に池田らのグループと関わりを持つようになり、その連絡役となったのが中原であった。彼は郷軍同志会側の意向を池田らのグループに伝え、交渉を行うと共に、池田らのグループの要望する活動を行うようになつていった。しかし、これは必ずしも郷軍同志会が下部組織化したことを示しておらず、例えば一九三五年に郷軍同志会が明倫会などと共に起こした国体明徴運動は陸

軍省の意志に反して行われたものである⁽¹⁷⁾。こうした状況を受けて、池田らのグループも次第に在郷軍人に対する統制を求めていくようになるのである⁽¹⁸⁾。

2、国政進出の実現

では、中原の新たな選挙母体である郷軍同志会は、中原の選挙戦にどのような貢献をしたのだろうか。

郷軍同志会が最初に挑んだ選挙戦は、一九三五年九月に実施された第二一回県会議員選挙であった。前回の選挙で愛勤党南信支部を基盤に初当選を飾った中原は、再び出馬して再選を果たすものと見られていたが、衆議院議員の任期満了が迫っていたことを受け、中央政界進出のために県会選挙には立候補しない意志を固めていた⁽¹⁹⁾。そして、「一身代わり候補」として郷軍同志会の幹部である市瀬繁⁽²⁰⁾を擁立しようとしていた⁽²¹⁾。郷軍同志会は、市瀬の他に全県で候補者を擁立しようと候補者の銓衡を行っていたが、これは順調には進まなかった。なぜならば、初の肅正選挙という情勢のもと、郷軍同志会の採るべき方針が定まらなかったからである。

一九三五年七月、松本連隊区司令部は長野県下の在郷軍人に対して「在郷軍人たるものは買取その他の不正選挙を

断乎として退け、あく迄清き投票を行ふべく、徒らに団体行動を伴つた選挙運動に関与すべきでない」という要旨の印刷物を配布した。こうした初の肅正選挙という情勢において在郷軍人の選挙違反者を出したくなかつた陸軍省や連隊区司令部では、組織的な選挙運動に在郷軍人が関わることを嫌つたのである。これは、郷軍同志会の候補者擁立を牽制するものとなつた。九月五日、こうした状況を受けて郷軍同志会は候補者擁立の断念を発表するのだった。

近く挙行さるゝであらう本県々会議員の選挙に対し、信州郷軍同志会は、紆余曲折の結果全面的に候補者を擁立して選挙戦を闘う事を差控へて、有能有徳なる候補者を支持し或は適當の候補者なき場合は候補たるとたらざるとに係らず、選挙区内において信頼すべき人の名を投じて将来への選挙界に多大の示さ⁽⁷⁾をあたふることに努める方針に決定した。近き将来に当つて吾人の健闘を要する事項は単に選挙のみではない。否、より以上に心身を捧げて善戦せねばならぬ重要な事柄が少くないのであるから今回の地方議会に代表を送るといふ事には、其地位にあつて順当に出馬しうる範圍の同志をのみ擁立し極力其当選を期すると共に、全面的には寧ろ無理をしないで其余力を蓄積し、満を持して

放たざる状態に置く事が必要だといふ結論に到着した⁽⁸⁾。

このように、郷軍同志会は全面的な候補者擁立は断念したものの、「其地位にあつて順当に出馬しうる範圍の同志」については出馬させる方針を採つた。そのため、中原は自身の選挙地盤確保のために政友派の幹部の一人であり、「順当に出馬しうる」と考えた市瀬を出馬させたのである。しかし、その市瀬も前述の陸軍省や連隊区司令部との関係から出馬を決めたのは、投票日一週間前の九月一八日であつた⁽⁹⁾。幸い愛勤党南信支部内でも当初から当選が見込まれていたことや、陸軍省新聞班長となつていた根本博からの資金援助もあり、定数五に対して得票数第四位で当選を果たした。

市瀬の当選を受けて、中原はいよいよ中央政界進出に向けて動き出すことになつた。しかし、この総選挙においても中原ら郷軍同志会は、再び肅正選挙という「障壁」にぶつかり、更なる配慮をしなければならなかつた。その「障壁」とは一九三六年二月二日に行われた連合分会長会議の席上、第一四師団連合支部長上野良丞少将が在郷軍人会として選挙運動に携わることを改めて禁止、個人の資格で立候補する場合であっても選挙違反を出さないよう訓示したことであつた⁽¹⁰⁾。地域では在郷軍人会と郷軍同志会を同一視し、

「在郷軍人会」分会の各集合に疑念を抱く者さへある」という状況であり、中原ら郷軍同志会では在郷軍人会と郷軍同志会が明確に異なる団体であることを示す必要に迫られた。そこで中原は在郷軍人会下伊那郡連合分会副長を辞任し、長野県第四区（松本市、南北安曇郡、東西筑摩郡で構成。以下長野四区と略記する）から出馬が決まっていた郷軍同志会会長の関重忠も在郷軍人会松本市連合分会会長を辞任した。立候補予定者の在郷軍人会役員の辞任により両者が異なる団体であることを明確に示そうとしたのである。

こうした肅正選挙にもかかわらず、選挙戦は追い風の中で推移した。なぜならば、政友派が下伊那地域を基盤とする候補者を擁立せず、更に「革新」勢力として人気を集めていた統一無産政党・社会大衆党が長野三区からの候補者擁立を断念したためであった。この結果、長野三区において「革新」を掲げる候補者は中原のみとなり、既成政党への批判が集まる中で中原への得票が集中した。開票の結果、中原は政友派の大物代議士小川平吉を破って初当選を飾り、全国にその衝撃が伝えられたのだ。しかし、一方で長野四区から出馬した関重忠は得票数最下位で落選しており、新聞では中原の当選には社会大衆党の浮動票が大ききな役割を担ったのだと報じられていた。この観測は決して

新聞報道に限ったものではなかった。中原の選挙参謀を務めた今村良夫（在郷軍人会川路村分会長）も同様の見方となり、中原の当選後に次のような書簡を送り、中原の政治姿勢の再考を求めたのであった。

前略 今回の当選は決して郷軍同志会の主義政策の勝利には無之、寧ろこれらは得票を減少したるものにて、氏の人格に対する期待と同情と、殊に郷軍を中心の周囲の情誼のこもつた投票が最後の勝利を得せしめたものと当地の同志は皆信じて居ります。兎に角充分に結果について研究をなし、確な認識の上に今後の戦いを進める事が必要と思ひます。多分に僥倖と考へられる点⁽¹⁰⁾が感ぜられます故、それだけ将来が案ぜられます。中谷イズムや三方系統の考へは何うも再吟味を要すると考へるが如何。軍人に重点をおくか、一般青壮年とム産党大衆に重点をおくかも考へる必要があらう。何が最も中原氏を大成させるかを考へて進んで頂きたい。

この中で今村は中原の当選を「僥倖」であるとし、中原が政治姿勢として標榜していた「右翼」的な革新の姿勢が逆に中原の「大成」を危うくすると述べている。その上で「軍人に重点をおくか、一般青壮年とム産党大衆に重点をおく

か」判断するよう求めたのであった。こうした意見は愛勲党南信支部の上飯田支部長を務める塚原隆美からも寄せられており、中原のもとで選挙運動を行っていた人々に広く共有されていた認識であった。

この今村の厳しい指摘の背景には中原ら郷軍同志会の掲げる政策が矛盾するという懸念が存在した。中原の選挙公報を見ると、彼は財政問題を挙げて軍備の充実と農村の匡救という二つの財政支出を並立して訴えている。しかし、そもそもこの両者は両立するであろうか。つまり、今村が「軍人に重点をおくか、一般青壮年とム産党大衆に重点をおくか」と求めたのは、重点をいずれか一方に置くべきだということだったのである。しかし、中原にとってこの両者は両立しうるものであった。なぜならば、前述したように中原の考える社会ダーウィン主義のもとでは国家は常に進歩・発展するものであって、そうした理念の下に政策を捉えていたからである。他方、中原が愛勲党南信支部創設以来掲げた半ば神がかり的な政治姿勢は、実際に生活の向上を求める人々からは支持されづらいものであった。今村が「中谷イヅムや三方系統」と批判したものがまさしくこれであった。こうした抽象的な政治姿勢と政策は、社会

大衆党の掲げる政策に対抗し得るものではなかったのである。

る。

こうした今村らの意見が杞憂でなかったことは、翌一九三七年に行われた第二〇回衆議院議員選挙で明らかとなった。この総選挙には中原のほか、社会大衆党から野溝勝が出馬し、「革新」を標榜する候補が二人となった。中原は開票一日目に自身の手帳に「得票が」無産派に及ばず。これでは郷軍の努力が分らぬ。今一般の奮起を要す」と記し、得票が思い通り伸びないことに苛立ちを示すのだった。最終的には得票数第三位で当選は果たしたものの（しかし、後掲図2で明らかかなように中原の主要選挙地盤の下伊那郡では得票数を減少させている）、社会大衆党に比べて支持が広がらないことを受け、中原は選挙母体の再強化と新たな活動を進めていくのである。

おわりに

中原謹司は、この総選挙後に日本農民連盟の結成に参加した。そして、郷軍同志会を同連盟に団体加盟させ、選挙母体としての同会の強化を図ったのだった。こうした中で「近衛新党」運動が開始され、中原もこれに積極的に関わりをもった。既に「軍の一躍進に伴ひ、無産党のみ膨大せん」という危機感を抱いていた中原は、自身の再選を目指

してこれに加わったのだった。

以上本稿で述べてきたように、中原は樋口秀雄の選挙参謀として政界との関わりを持ち、政界進出を図ろうと選挙基盤の強化に努めた。この中で中原が選挙母体として選んだのが、愛勤党南信支部や郷軍同志会などといった「右翼」系団体であった。中原はこれらの団体を足場にして県会、そして中央政界へと進出を果たし、自身の大成を図ろうとした。しかし、愛勤党南信支部は県会への足がかりとはなかったものの、青壮年のみを基盤としていたために選挙母体としては脆弱であり、在郷軍人を組織したと言われる郷軍同志会もその抽象的な政策と政治姿勢ゆえに脆弱な選挙母体であった。そのため、中原は第一九回衆議院議員選挙で初当選を飾ったが、その当選は「僥倖」と見られてしまったのである。これは、同じ「革新」を標榜する勢力でも現実的な政策を示していた社会大衆党が強い人気を誇ったことを裏付けているとも言えるだろう。

また、中原の人物像について言えば、彼は現実主義的な人物であり、また社会ダーウィン主義者でもあった。つまり、中原の政治姿勢は常に社会ダーウィン主義の「前へ」が前提となっており、その上に現実主義的な政治行動があった。こうした姿勢が青壮年の人気を集め、「下伊那民

政派のホープ」へと成長したゆえんであったとも言えるだろう。ただ、中原の「前へ」という姿勢は同時に「親軍」という姿勢をも帯びていた。中原は「好戦論者」ではなかったが、「不戦論者」でもなかったのである。

本稿は、中原謹司の中央政界における職業政治家としての姿とその選挙母体について、従来取り上げられてこなかった視点から明らかにした。ただ、中原が積極的に関わった一九三八年の「近衛新党」運動以降の活動については、紙幅の関係上、触れることができなかった。これについては別稿を期したい。

表 第12回総選挙～第21回総選挙までの選挙得票数

① 第12回総選挙 (1915.3.25)

| | | | | |
|------------|--------|--------|-------|----|
| 第9区 郡部区 | ○ | 降旗元太郎 | 5,165 | 同志 |
| | ○ | 小坂順造 | 4,481 | 政友 |
| | ○ | 樋口秀雄 | 4,309 | 同志 |
| | ○ | 矢島浦太郎 | 3,438 | 同志 |
| | ○ | 小川平吉 | 3,060 | 政友 |
| | ○ | 翠川鉄三 | 3,041 | 政友 |
| | ○ | 玉井権右衛門 | 3,019 | 政友 |
| | ○ | 岡部次郎 | 2,990 | 中正 |
| | ○ | 塩川幸太 | 2,959 | 政友 |
| | ○ | 風間礼助 | 2,488 | 中正 |
| | ○ | 中島精一 | 2,276 | |
| | ○ | 伊原五郎兵衛 | 2,044 | |
| | ○ | 伊藤大八 | 1,686 | 政友 |
| ○ | 山本禎三郎 | 1,266 | | |
| ○ | 久保田与四郎 | 713 | 国民 | |

② 第13回総選挙 (1917.4.20)

| | | | | |
|------------|---|--------|-------|----|
| 第9区 郡部区 | ○ | 小川平吉 | 4,554 | 政友 |
| | ○ | 南沢宇忠治 | 4,149 | 政友 |
| | ○ | 小田切磐太郎 | 3,910 | 政友 |
| | ○ | 百瀬清治 | 3,821 | 政友 |
| | ○ | 降旗元太郎 | 3,815 | 憲政 |
| | ○ | 工藤善助 | 3,687 | 政友 |
| | ○ | 岡部次郎 | 3,432 | 憲政 |
| | ○ | 植原悦二郎 | 3,432 | 国民 |
| | ○ | 樋口秀雄 | 3,418 | 憲政 |
| | ○ | 中村弥六 | 3,138 | |
| | ○ | 市村連 | 2,926 | 憲政 |

③ 第14回総選挙 (1920.5.10)

| | | | | | |
|------|---|---|------|-------|----|
| 第12区 | 1 | ○ | 樋口秀雄 | 5,201 | 憲政 |
| | | ○ | 伊藤大八 | 4,059 | 政友 |

④ 第15回総選挙 (1924.5.10)

| | | | | | |
|------|---|---|-------|-------|----|
| 第12区 | 1 | ○ | 樋口秀雄 | 4,903 | 憲政 |
| | | ○ | 平野桑四郎 | 4,878 | 政友 |

⑤ 第16回総選挙 (1928.2.20)

| | | | | | |
|-----|---|---|--------|--------|----|
| 第3区 | 4 | ○ | 樋口秀雄 | 17,932 | 民政 |
| | | ○ | 小川平吉 | 17,452 | 政友 |
| | | ○ | 伊原五郎兵衛 | 16,035 | 政友 |
| | | ○ | 戸田由美 | 14,526 | 民政 |
| | | ○ | 山田織太郎 | 11,778 | 政友 |
| | | ○ | 藤森成吉 | 6,916 | 労農 |
| | | ○ | 原田治郎 | 2,097 | 政友 |

⑥ 第17回総選挙 (1930.2.20)

| | | | | | |
|-----|------|-------|--------|--------|----|
| 第3区 | 4 | ○ | 戸田由美 | 18,451 | 民政 |
| | | ○ | 北原阿智之助 | 17,515 | 民政 |
| | | ○ | 林七六 | 16,374 | 政友 |
| | | ○ | 宮澤胤勇 | 15,637 | 民政 |
| | | ○ | 平野桑四郎 | 15,134 | 政友 |
| | | ○ | 原田治郎 | 2,661 | |
| ○ | 山崎一雄 | 2,421 | 社民 | | |

⑦ 第18回総選挙 (1932.2.20)

| | | | | | |
|-----|------|-------|-------|--------|----|
| 第3区 | 4 | ○ | 小川平吉 | 18,279 | 政友 |
| | | ○ | 平野桑四郎 | 18,108 | 政友 |
| | | ○ | 有馬浅雄 | 13,392 | 政友 |
| | | ○ | 戸田由美 | 13,214 | 民政 |
| | | ○ | 宮澤胤勇 | 12,097 | 民政 |
| | | ○ | 遠山方景 | 11,654 | 民政 |
| ○ | 中原謹司 | 3,126 | 愛勤 | | |

⑧ 第19回総選挙 (1936.2.20)

| | | | | | |
|-----|---|---|--------|--------|----|
| 第3区 | 4 | ○ | 宮澤胤勇 | 19,168 | 民政 |
| | | ○ | 木下信 | 13,989 | 民政 |
| | | ○ | 北原阿智之助 | 12,646 | 民政 |
| | | ○ | 中原謹司 | 11,049 | 郷軍 |
| | | ○ | 小川平吉 | 10,487 | 政友 |
| | | ○ | 有馬浅雄 | 5,529 | 政友 |
| | | ○ | 戸田由美 | 5,269 | 国同 |
| | | ○ | 小塩完次 | 3,290 | |
| | | ○ | 木村直交 | 3,275 | 政友 |

⑨ 第20回総選挙 (1937.4.30)

| | | | | | |
|-----|-------|-------|--------|--------|----|
| 第3区 | 4 | ○ | 宮澤胤勇 | 17,784 | 民政 |
| | | ○ | 北原阿智之助 | 12,249 | 民政 |
| | | ○ | 中原謹司 | 11,749 | 時協 |
| | | ○ | 野溝勝 | 11,614 | 社大 |
| | | ○ | 木下信 | 10,180 | 民政 |
| | | ○ | 金子靖夫 | 6,949 | 政友 |
| ○ | 代田芳太郎 | 5,851 | 政友 | | |

⑩ 第21回総選挙 (1942.4.30)

| | | | | | |
|-----|-------|-----|---------|--------|----------|
| 第3区 | 4 | ○ | 木下信 | 21,890 | 推薦(旧民政) |
| | | ○ | 小平権一 | 20,214 | 推薦(中立) |
| | | ○ | 吉川亮夫 | 16,283 | 推薦(旧民政) |
| | | ○ | 中原謹司 | 15,478 | 推薦(旧郷軍) |
| | | ○ | 宮澤胤勇 | 11,830 | 非推薦(旧民政) |
| ○ | 片倉弥太郎 | 737 | 非推薦(中立) | | |

1) 党派の略称は以下の通りである。

政友 = 立憲政友会、同志 = 立憲同志会、中正 = 中正会、
 国民 = 立憲国民党、憲政 = 憲政会、民政 = 立憲民政党、
 労農 = 労働農民党、社民 = 社会民衆党、愛勤 = 愛国勤労党、
 国同 = 国民同盟、郷軍 = 信州郷軍同志会、時協 = 時局協議会、
 社大 = 社会大衆党、空欄 = 無所属

2) 第21回総選挙においては、翼賛政治体制協議会からの推薦、
 非推薦に加えて、旧所属党派も併記した。

図1 総選挙における中原謹司得票数推移

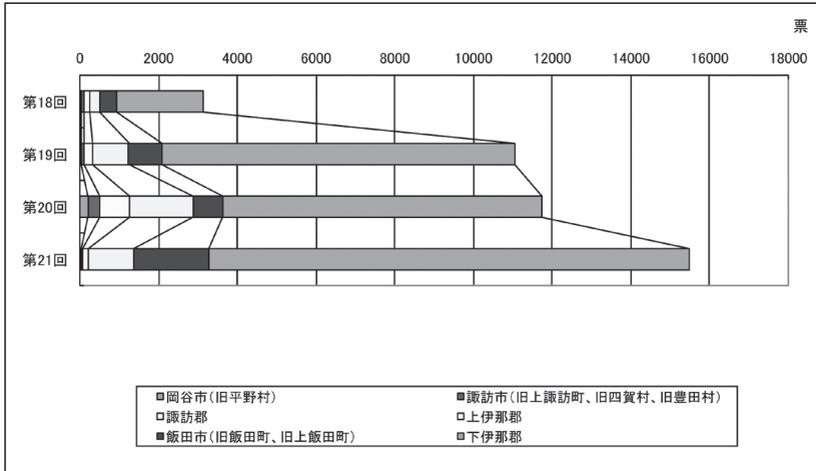
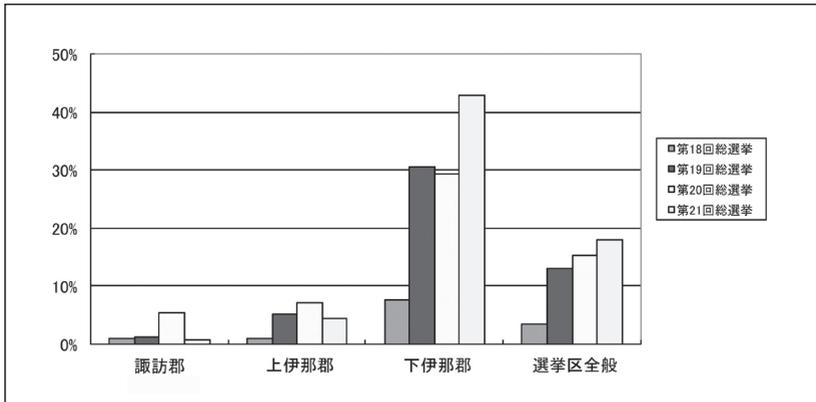


図2 総選挙における中原謹司得票率



注

- (1) 「右翼」という概念が指す範疇は論者により異なるが、本稿において「右翼」という概念は内務省警保局が「国家主義」と呼称したものをいう。尚、戦前期「右翼」研究の現状については岡佑哉「大日本生産党研究序論 戦前期「右翼」研究の現状と課題」(愛知学院大学大学院文学研究科「文研会紀要」二三号、二〇一二年三月)に詳しい。
- (2) 佐々木敏二「一地方におけるファシズム運動―長野県下伊那の場合―」(藤井松一・岩井忠熊・後藤靖編「日本近代国家と民衆運動」(有斐閣、一九八〇年))。
- (3) 須崎慎一『日本ファシズムとその時代』(大月書店、一九九八年)。尚、同書は須崎氏がそれまで発表した論考を時系列に編纂したものである。須崎氏はその後、「信州郷軍同志会の誕生―退職に当たつての市瀬繁文書による補足―」(神戸大学大学院国際文化学研究所日本学コース「日本文化論年報」一三号、二〇一〇年三月)、「信州郷軍同志会と日中戦争」(飯田市歴史研究所『飯田市歴史研究所年報』八号、二〇一〇年八月)をそれぞれ発表し、同書の郷軍同志会に関する検討について補足及び再検討を行った。
- (4) こうした視点から下された中原の人物像に疑問を感じた牧内雪彦氏は、「明治生まれの郷土青年―中原謹司の大作・昭和史―」(伊那史学会『伊那』五〇―二、二〇〇二年二月)において「郷土の先覚」という視点で人物像の再検討を行った。これは管見の限り中原謹司を取り上げた唯一の論考である。
- あり、これによって政界進出以前の中原の動向が明らかになった。しかし、伝記的性格が強く、中原の中央政界進出過程については言及されていない。
- (5) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「中原謹司文書」。以下、「中原文書」と略記し、請求番号を付記する。
- (6) 飯田市歴史研究所蔵「市瀬繁文書」。以下、「市瀬文書」と略記し、請求番号を付記する。
- (7) 同右「小林八十吉文書」。以下、「小林文書」と略記し、請求番号を付記する。
- (8) 国立国会図書館新聞資料室所蔵「信濃毎日新聞」[マイクロフィルム版]。以下、「信毎」と略記する。
- (9) 飯田市中央図書館所蔵「南信新聞」[マイクロフィルム版]。以下、「南信」と略記する。
- (10) 同右「信濃時事新聞」[マイクロフィルム版]。以下、「信濃時事」と略記する。
- (11) 前掲註(4)「明治生まれの郷土青年―中原謹司の大作・昭和史―」、三四―三五頁、赤羽篤ほか編「長野県歴史人物大事典」(郷土出版社、一九八九年)、五一―七頁、衆議院・参議院編「議会制度百年史 院内会派編衆議院の部」(大蔵省印刷局、一九九〇年)、五一―三頁。
- (12) 『*Daigaku*』大正四年四月四日〜七月四日他(「中原文書」三三四二、以下「大正四年中原日記」と略記する)、四月一五日の条。以下史料引用にあたっては、漢字は現代のものになおし、適宜句読点を補った。

- (13) 樋口秀雄(一八七五—一九二九)は、明治期から昭和初期に活躍した政治家、社会学者、文芸評論家である。号は龍峽。筑摩県伊那郡飯田町(現飯田市)の銀行家の家に生まれ、旧制第一高等学校を経て、一八九七年に東京帝国大学文科大学哲学科に進んだ。その後、文芸界に進み、雑誌『太陽』で「美的生活論を読んで橋牛子に与ふ」を発表して著名になった。一九一五年の第二回衆議院議員選挙において立憲同志会から出馬し、初当選した(深志同窓会編『深志人物誌Ⅱ』〈深志同窓会、一九九六年〉、七四—八六頁)。
- (14) 理想選挙同盟会とは、理想選挙の実現を目的とした団体である。理想選挙とは、日露戦後に選挙買収事件の広域化や大規模化に反対する動きの中から生まれた考えであり、買収などの不正行為や情実などではなく、演説や文書送付によって選挙運動を展開する方法をいう。理想選挙の実現を目指す運動は様々な団体を生み出したが、それらの団体は一九一一年に理想選挙同盟会として統合され、全国に支部を設置した。季武嘉也氏はこの動きを「非政友会系グループである国民主義的対外硬派の運動」と捉えている(季武嘉也『選挙違反の歴史 ウラからみた日本の一〇〇年』〈吉川弘文館、二〇〇七年〉、一一四—一一五頁)。
- (15) 「大正四年中原日記」、三月七日の条。
- (16) 清水迪夫『一地方における近代思想のあゆみ—長野県下伊那政治運動史試論』(銀河書房、一九八九年)、六六—六八頁。
- (17) 同右。
- (18) 「大正四年中原日記」、三月七日の条。
- (19) 佐藤能丸「大隈伯後援会に関する一考察—市島謙吉の日記を中心として—」(日本史攷究会編『日本史攷究』〈文献出版、一九八一年〉、四〇五—四二七頁)。
- (20) 「手帳 大正四年」(中原文書)三〇六六)には、大隈伯後援会下伊那支部の発会に向けた様々な打ち合わせ事項や日程などが記されており、中原が支部発足に関わった主要人物の一人であったことが判明する。
- (21) 前掲註(12)「大正四年中原日記」、三月八日の条、「大正四年三月 大隈伯後援会下伊那支部趣意書並宣言」(長野県編『長野県史』近代史料編第三卷(一)〈長野県史刊行会、一九八三年〉、四三六—四三七頁)。尚、大隈伯後援会下伊那支部の発会式は選挙後の四月二三日に挙行され(大正四年中原日記)、四月二二日の条、これを基盤として樋口の後援会組織が形成されることになる。
- (22) 同右、二八—二九頁。
- (23) 「ノート」(中原文書)三二九四)には、憲政派の宣言及び決議の草稿が残されており、中原がこの起草を行ったと推測できる。
- (24) 長野県編『長野県政史』(長野県、一九七二年)、三九—四一頁。
- (25) もともと天竜川の水力発電は下條電気K、Kと米川電気の二社に分れており、その二社が合併して新たに設立され

たのが南信電気株式会社である。この合併の背景には天竜川水力発電問題があり、これには樋口支持派の中核である南信壮年団が深く関わっていた。つまり、この問題の背景には政友会系の投資家への反発があり(前掲註(24))『長野県政史』、四四頁)、中原の支配人着任は南信壮年団の「反政友」運動の結果であった。

- (26) 前掲註(2)「一地方におけるファシズム運動―長野県下伊那の場合―」、二七七―二七九頁。自由青年連盟は、一九二二年五月羽生ら五名を中心に結成された「下伊那文化会」という社会主義研究グループを大衆組織化したものである。

- (27) 同右、二七五―二八〇頁。

- (28) 森本州平(一八八五―一九七一)は、下伊那郡山本村に生まれ、同郡松尾村の名望家であった森本勝太郎の婿養子となった。一九〇八年、東京高等商業学校卒業後に一年志願兵として入営し、陸軍主計少尉で退官した。帝国在郷軍人会松尾村分会長や下伊那郡連合分会副長、更に百十七銀行常務、松尾村議などを務め、下伊那郡の地方名望家として地域政治に深く関わっていた。尚、中原にとつて森本は飯田中学校の二期先輩にあたり、そもそも両者は面識があった。のちに森本は中原の有力な支援者として親交を深めることになる(須崎慎一「史料紹介―森本州平日記(抄)」(一九二四(大正一三)年前半期分)(神戸大学教養部「論集」三五号、一九八五年三月)、五七―五八頁)。

- (29) 同右、五月九日の条。

「右翼政治家」中原謹司試論(田上)

- (30) 前掲註(24)『長野県政史』、四五頁。

- (31) 同右。

- (32) 同右。

- (33) 長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編『下伊那青年運動史』(国土社、一九六〇年)、七三―七四頁。

- (34) 「森本州平日記」によれば、樋口派は「平野は県議長として名議長樋口は国会議員として適任」という宣伝を行い、政友派幹部の一人である森本も「樋口派の宣伝巧妙なり」と記している(前掲註(28))「史料紹介―森本州平日記(抄)」(一九二四(大正一三)年前半期分)、五月七日の条。

- (35) 前掲註(3)『日本ファシズムとその時代』、七六頁。

- (36) 同右、七七頁。

- (37) 同右、七九―八〇頁。

- (38) 須崎慎一「史料紹介―森本州平日記(抄)」(一九二五(大正一四)年一〇―十二月)(神戸大学教養部「論集」三九号、一九八七年三月)、一月二一日の条。

- (39) 前掲註(2)「一地方におけるファシズム運動―長野県下伊那の場合―」、二八四―二八五頁。ここで佐々木氏は、作興会の役員構成から大平豁郎、森本州平、中原謹司などが在郷軍人会の幹部が中心であったと述べているが、この見方は妥当ではない。作興会発足以降の森本の日記を見る限り、中原は具体的な活動に参加しているわけではなく、単に名を連ねていただけであった。

- (40) 帝国在郷軍人会下伊那郡連合分会編「軍教問題対談会

- 記事」(帝国在郷軍人会下伊那郡連合分会、一九二六年)、二五—三三頁(「中原文書」一四六六)。
- (41) 社会ダーウイン主義とは、ダーウイン(Charles Robert Darwin)の生存競争説によつて、社会進化の原理を生存競争や自然選択に求める考え方である。スペンサー(Herbert Spencer)の社会進化論的社会学がその最初の体系であり、例えば「反軍演説」で知られる斎藤隆夫も社会ダーウイン主義のもと戦争肯定論を唱えていた(出原政雄「斎藤隆夫の軍部批判の論理と戦争肯定論」〈同志社法学会「同志社法学」六三一—二〇一一年六月〉、一六三—一六五頁)。このことから分かるようにこの社会ダーウイン主義に基づく戦争肯定論は決して特異な認識ではなく、むしろ当時の社会情勢の中では一般的な認識であつた。
- (42) 前掲註(40)に同じ。
- (43) 同右。
- (44) 前掲註(3)『日本ファシズムとその時代』、八一頁。
- (45) 前掲註(16)『二地方における近代思想のあゆみ—長野県下伊那政治運動史試論』、一三六頁。
- (46) 前掲註(14)『選挙違反の歴史 ウラからみた日本の一〇〇年』、一三九—一四〇頁。
- (47) 前掲註(33)『下伊那青年運動史』、八七—八八頁。
- (48) 憲政一新会は昭和初期に結成された議会内小会派で、民政党内の反幹部派である小寺謙吉、樋口秀雄、田中善立らが中心人物であつた。同会は、第五六回帝国議会において政友会との提携の態度を明らかにし、一九二九年八月には解散して政友会に合流したことから、議会対策に苦しんでいた政友会の民政党切り崩し工作ではないかと見られていた。
- (49) 内務省警保局編『復刻版 昭和初期政党政治関係資料』第四卷(不二出版、一九八八年)、四二頁。
- (50) 東京大学文学部日本近代史ゼミ「史料紹介 森本州平日記(二)」(東京大学日本史学研究室「東京大学日本史学研究室紀要」一二号、二〇〇八年三月)、二月一日の条。
- (51) 同右、二月一日の条。
- (52) 前掲註(3)『日本ファシズムとその時代』、九五頁。
- (53) 遠山方景(一八七六—一九五六)は、下伊那郡平岡村生まれの政治家。飯田郵便局長を務めるかたわら憲政派の「軍師」として活躍したといわれ、一九三五年に長野県会議員補欠選挙に出馬して当選し、以後三期務めた。県会においては副議長まで歴任し、一九四一年から飯田市長を務めた(前掲註(11)『長野県歴史人物大事典』四八三—四八四頁)。
- (54) 『信毎』一九三二年七月二日付、夕刊、二面。
- (55) 前掲註(50)「史料紹介 森本州平日記(二)」、一月二六日の条。
- (56) 同右、一月二七日の条。
- (57) 同右。
- (58) 同右、一月二八日の条。
- (59) 前掲註(56)に同じ。
- (60) 同右、一月二一日の条。

- (61) 前掲註(3)『日本ファシズムとその時代』、一〇八頁及び「宣言・決議」(「中原文書」一六六三)。
- (62) 座光寺久男(一九〇七—一九七八)は、「三・一五事件」により解体した郡青を再建し、郡青委員長の座にあったが、愛勤党南信支部の結成に関与して支部発足と共に書記長に就任した。その後、長野県職員となり、新体制運動が始まるとこれに関わり、長野県下の翼賛壮年団に強い影響力を持った。戦後は駒ヶ根市助役を経て市長に就任した(前掲註(11)『長野県歴史人物大事典』三三八—三三九頁)。
- (63) 前掲註(3)『日本ファシズムとその時代』、一〇九頁。
- (64) 同右。尚、中谷と森本の関わりは、森本が講演依頼のために中谷を訪ねたことに始まる。その後、全日本興国同志会が結成され、これを基に愛勤党が発足すると、中谷は党本部の幹部として党勢拡張に努めた。中谷による森本への「引退宣告」は党幹部としてなされたものである(中谷武世『昭和動乱期の回想』上(泰流社、一九八九年)、一八六—一八八、二〇—二二七頁)。
- (65) 『南信』一九三二年五月三〇日付、二面。
- (66) 同右。
- (67) 『信毎』一九三二年八月一日付、三面。
- (68) 同右。
- (69) 『南信』一九三二年八月二九日付、二面。
- (70) 『信毎』一九三二年八月一日付、四面。
- (71) 『信濃時事』一九三二年一〇月一日付、二面。
- (72) 『信毎』一九三二年九月一日付、四面。
- (73) 前掲註(71)に同じ。
- (74) 当時、中立を標榜して立候補し、当選確定後に政党に入党(復党)するということとはよく行われていた(『信毎』一九三二年七月五日付、夕刊、一面)。中原も脱党して愛勤党南信支部から立候補したものの、いわゆる「中立候補」であり、再び民政派に戻る期待感があった。そのため、後述のように民政派から復党要請がなされるのである。
- (75) 『南信』一九三二年九月二一日付、三面。
- (76) 同右、一九三二年九月二四日付、二面。この記事によれば、民政派の幹部が中原に演説会場を提供し、民政派がこれに抗議しても会場提供は覆らなかったという。
- (77) 『信毎』一九三二年九月二四日付、二面。
- (78) 『南信』一九三二年一〇月五日付、二面。
- (79) 『昭和六年一二月二日 党大会決定事項通知』(「中原文書」一六七五)。
- (80) 『信毎』一九三二年一月七日付、四面。
- (81) 同右、一九三二年一月二四日付、夕刊、一面。
- (82) 「森本州平宛選挙御礼」(早稲田大学中央図書館所蔵「森本州平・中原謹司文書」M一五四—一五)。以下、早稲田大学中央図書館所蔵「森本州平・中原謹司文書」は「早稲田文書」と略記し、請求番号を付記する。
- (83) 『信毎』一九三二年一月三二日付、五面及び『信濃時事』一九三二年一月三二日付、二面。

- (84) 伊藤隆『近衛新体制』（中央公論社、一九八三年）、二二―二四頁。
- (85) 『信毎』一九三二年一月二八日付、四面。
- (86) 同右、一九三二年二月二日付、二面。
- (87) 前掲註(3)『日本ファシズムとその時代』、一三四―一三五頁。
- (88) 前掲註(71)に同じ。
- (89) 『南信』一九三二年一月六日付、二面。
- (90) 一九三二年二月九日付森本平宛中原謹司書簡（『早稲田文書』M一五四―五）。尚、中原の援助を求める電報が県会選挙時に中原を支援した市瀬繁にも発信されており（『市瀬文書』一七一―一七八）、選挙終盤における中原の資金難が窺える。
- (91) 法政大学大原社会問題研究所蔵『信州郷軍』一九三三年四月三日付、四面。尚、『信州郷軍』は郷軍同志会の機関紙で、猶興社が発行していた『信濃国民新聞』を改題する形で発刊された。以下、法政大学大原社会問題研究所蔵『信州郷軍』は『信州郷軍』と略記する。
- (92) 連隊区将校団は在郷将校によって構成されていた。尚、在郷将校という呼称は明治頃から散見され、「予備役後備役退役将校同相当官」と言うのが正式である。
- (93) 前掲註(2)「二地方におけるファシズム運動―長野県下伊那の場合―」、三一九頁。
- (94) 東京の在郷軍人会有志とは、藤田茂一郎（在郷軍人会本部審議員）、関仲次郎（東京府連合分会会長）、向山軍二郎（浅草分会会長）、新島鍋三郎（深川分会会長）らを指す。彼らは後述する古思了が麻布連隊区時代に「全日本郷軍同志会構想」を実現しようと指導した郷軍人会幹部だった（前掲註(3)『日本ファシズムとその時代』、一〇四頁）。
- (95) 前掲註(93)に同じ。
- (96) 明倫会会史編纂所編『明倫会会史』（明倫会会史編纂所、一九四二年）、七二―七頁。明倫会は一九三二年に田中国重陸軍大將を中心として結成された在郷軍人組織であり、組織の中心は石原広一郎が担っていた。石原は現役将校と積極的に関わりをもっており（赤澤史朗「石原廣一郎小論（一）―その国家主義運動の軌跡―」（立命館大学法学部『立命館法学』二四五号、一九九六年一月）、二三〇頁）、中原は石原のもつ人脈と資金を得ようと参加したものと推測される。
- (97) 粟谷憲太郎『昭和の政党』（岩波書店、二〇〇七年）、九五―九八頁。
- (98) 古思了は一九〇五年に久留米連隊区に入隊後、一九〇七年に陸軍士官学校を卒業（陸士一九期）。一九一四年青島守備軍、一九二〇年久留米連隊区副官、一九二四年少佐任官、一九二六年茂山守備隊長、一九二九年麻布連隊区司令部付、一九三一年松本連隊区司令部付、一九三三年水戸連隊留守隊長、一九三五年沖繩連隊区司令官、一九三七年歩兵第八連隊長を歴任し、一九三八年に予備役編入。一九四一年岡山連隊区司令官となり、一九四五年の終戦までその任にあつ

た(前掲註(3))『日本ファシズムとその時代』、一〇三一—一〇五頁。

(99) 同右。

(100) 同右、一六六頁。

(101) 前掲註(99)に同じ。

(102) 前掲註(3)「信州郷軍同志会の誕生—退職に当たつての市瀬繁文書による補足—」、五三—五四頁。

(103) 同右。

(104) 「写 支部情報資料」〔中原文書〕一五二〇。尚、この史料は帝國在郷軍人会松本支部が発行する機関誌『松本支部報』の原稿を複写したもので、在郷軍人会松本支部の役割も担う松本連隊区司令部から長野県下の各在郷軍人会役員に送付された。尚、同原稿は『松本支部報』一九三三年六月号に掲載された(藤原彰・功刀俊洋編『資料日本現代史』第八卷〈大月書店、一九八三年〉、五〇三—五〇五頁)。

(105) 同右。

(106) 郡司淳「軍人の政治化—在郷将校をめぐる軍事と政治—」(大濱徹也編『国民国家の構図』(雄山閣出版、一九九九年)、一九一—一九二頁)。

(107) 日本近代史料研究会編『牧達夫談話速記録』(日本近代史料研究会、一九七九年)、二九—三一頁。

(108) 例えば、池田純久執筆といわれる「陸軍当面の非常時政策」(一九三五年)では、「郷軍背景の政治団体の自然発生的簇出は将来の郷軍統制上障害化せる惧れ」があり、「郷軍利用

「右翼政治家」中原謹司試論(田上)

の組織は軍部当面の急務中の急務なり」と述べている(秦郁彦『軍ファシズム運動史』(河出書房新社、一九七七年)、三五六頁)。ただ、それ以後も在郷軍人を背景とする政治団体を統制する方針は定められず、一九三六年二月になり「在郷軍人を主体とする政治的色彩ある団体及右翼団体に対する憲兵の取締方針に関する件」としてようやく方針が定められるに至った。尚、この方針において在郷軍人を背景とする政治団体に対して「現役軍人、軍隊に働きかけざること」、「在郷軍人会の統制を紊し、若は会の名目を僭称し、又は濫用せざること」、「軍の方針より逸脱せざること」、「合法的なること」という四点を求めることになった(アジア歴史資料センター『陸軍省大日記甲輯 昭和十一年』第四類第一冊〈防衛省防衛研究所蔵〉「在郷軍人を主体とする政治的色彩ある団体及右翼団体に対する憲兵の取締方針に関する件」レファレンスコードC0100132400)。

(109) 『信毎』一九三五年八月二〇日付、一面及び八月二五日付、夕刊、一面。

(110) 『信濃時事』一九三五年九月二〇日付、二面。

(111) 市瀬繁(一八九〇—一九七二)は、一九〇四年に飯田小学校高等科を卒業後、飯田中学校に進んだ。小学校助教を経て一九一〇年に第一四師団騎兵第二六連隊に一年志願兵として入隊。その後、少尉に任官(のち中尉に進む)。一九一五年、伊賀良村収入役を経て、一九二二年には村会議員に当選した。在郷軍人会下伊那郡連合分会長を務めて

おり、一方で政友派の幹部の一人であった(伊賀良村史編纂委員会編『伊賀良村史』(伊賀良村史刊行会、一九七三年)、一二六二頁、『信毎』一九三五年九月二一日付録「県会議員総選挙候補者一覽」)。

(112) 『南信』一九三五年八月二六日付、三面。

(113) 『信毎』一九三五年九月五日付、一面。この記事によれば、下伊那の他に上水内、南佐久、東筑摩、諏訪、上高井、松本などから候補者を擁立しようと計画していたという。

(114) 『南信』一九三五年七月一四日付、三面。

(115) 『信州郷軍』一九三五年九月五日付、一面。尚、同文の草稿が「県々会議員選挙に対する信州郷軍同志会方針」として中原文書に残されている(「中原文書」一七二二)。

(116) 『信毎』一九三五年九月一九日付、一面。

(117) 一九三五年八月一七日付小林八十吉宛林武男書簡(「小林文書」一三九一―三七九)。尚、差出人の林武男は愛勤党南信支部の千代村支部長である。

(118) 前掲註(3)、『日本ファシズムとその時代』、二六六頁及び「信州郷軍同志会と日中戦争」、三五頁。須崎氏によれば、九月五日に中原が根本博に県会選挙の資金援助を要請した際、根本は内務省への便宜供与を約したという。

(119) 『信毎』一九三六年二月三日付、二面及び「信濃時事」一九三六年二月三日付、二面。

(120) 同右。

(121) 一九三六年一月二八日付市瀬繁・下田史郎宛中原謹司書

簡(「市瀬文書」一八一―二五八)。尚、この中原の辞表はのちに受理され、下伊那郡連合分会顧問に委嘱されるに至った(「中原文書」二九七九)。

(122) 『信毎』一九三六年二月八日付、夕刊、一面。

(123) 前掲註(16)、「二地方における近代思想のあゆみ―長野県下伊那政治運動史試論」、一九三頁。尚、清水氏によれば第二一回県会選挙時に長野三区の各候補が獲得した得票数は、下伊那の羽生三七が五六五七票(当選)、上伊那の野溝勝が二三〇〇票(落選)、諏訪の林虎雄が二二四四票(当選)で、得票数合計は一万票程度であったという(同前、一八九―一九〇頁)。

(124) 『信毎』一九三六年二月二三日付、一面。

(125) 『東京朝日新聞長野県版』一九三六年二月二三日付、一面(国立国会図書館憲政資料室所蔵「小川平吉文書」R―37)。

(126) (一九三六カ)年二月二四日付小林八十吉宛村良夫書簡(「小林文書」一三九一―三五一八)。

(127) 一九三六年三月一四日付小林八十吉宛塚原隆美書簡(「小林文書」一三九一―三二二五)。この書簡の中で塚原は「如何なる人々と一緒に成つて活動さる、か其指針を十分に研究して進まざれば氏の今後の政治的立場に影響ある処大ならん」と述べている。

(128) 「第一九回衆議院議員選挙 選挙公報」(「市瀬文書」三一四六)。

(129) 「手帳 昭和二年五―八月」(「中原文書」三〇九七)。

(130) 「手帳 昭和二年一〜四月」〔中原文書〕三〇九六。

〔付記〕 本稿は、二〇二二年一月に法政大学文学部史学科に提出した卒業論文の一部を修正・加筆したものである。

「右翼政治家」中原謹司試論（田上）